

音・雑記-ひなの里通信-(2)

一本の鉛筆があれば

狭間 壮

「一本の鉛筆」という歌があるのを父からの電話で知った。20年はど前のことであったか...。“一本の鉛筆があれば、戦争は嫌だと私は書く”松山善三の詩に佐藤勝が付曲した美しい反戦歌である。

原子爆弾を投下された広島。その悲劇と平和への祈りを歌ったもので、美空ひばりが第1回の広島平和音楽祭のステージで熱唱した。

反核平和コンサート(東京・新宿)でメゾソプラノの芝田貞子がこの曲を歌うのを聞いて感銘を受けた父が、さっそく電話を寄こしたのだった。

美空ひばり・「一本の鉛筆」・反核平和コンサート・芝田貞子・父からの電話。私と「一本の鉛筆」との出会いである。美空ひばりが反戦歌を歌っていた。その歌をドイツリートの専門家・芝田貞子が歌う。佳曲はジャンルを越えてなのだ。新鮮な驚きであった。

なんで無謀な戦争(太平洋戦争)をストップできなかったのか? 若者たちの質問に、作家・早乙女勝元は「海外に自衛隊を派遣している今、日本は、私たちは、銃後にいるのかもしれませんが、気がつかないうちに」と応じるのだと言う。銃後とは戦場の後方。直接戦闘の場になくても、その補給活動等を展開すれば、後方支援である。これも一つの銃後の状況と言えるかもしれないのだ。あれよ、あれよで始まった戦争。止める術ももたない早乙女は、その当時12才の少年であった。

その戦争を結果として鼓舞する役割を果たした音楽家たち。美しい歌曲を書いた北原白秋も山田耕作も例外でなく、他に数え上げればきりが無い。

この8月13日、私は「一本の鉛筆があれば」をタイトルに冠したコンサートを開く。美空ひばり、芝田貞子から受けとった「一本の鉛筆」で綴る平和コンサートは、ここ松本の地で今年4回目の夏を迎える。

そして、反戦・平和への思いを、今こうして一本の鉛筆を手にかけている。誰かへどこかに、この思いが輪になって届いて欲しい、の願いをこめて。

2006.8.1月刊・音楽の世界8月号より転載

◎CD「世界中の子どもたちが」の中に「一本の鉛筆」が収録されています。